

Essay

Sapiarc.com

2012年5月21日(2012-05)

1枚の写真つき葉書

今月15日に1枚の葉書を受け取った。送ってきたのは中学で同級生だったF.Y.さんという女性だが、残念ながら私はその人を知っているとは言えない。最近行われた学年同窓会で撮った写真の裏が葉書になっており、絵葉書と同じ形のものだ。デジカメの普及で、こういうものを作ることができるようになったのだろう。

葉書には、学年同窓会の模様を簡単に書いた文章が印刷されており、最後に手書きで「懐かしい方のお顔に見覚えがございますよう」と書き添えてある。葉書大の集合写真には、出席した先生2人と同窓生26人が写っているが、誰が誰かまったくわからない。拡大鏡でひとりひとりの顔を見たが、やはり同じことだった。先生のひとりだけが、あの先生らしいなと思えた。

私が中学を卒業したのは昭和27年(1952年)だから、ちょうど60年前だ。それから今まで、私はこの同窓会に出席したことは一度もない。だから、誰が誰かわからなくても当然なのだ。60年という年月の重みを改めて感じた。写真で、あの先生らしいと思えた先生は今年卒寿だそうだから、当時は30歳だったのだ。先生も若かった。

私が卒業した中学は大田区立田園調布中学だが、実は私がこの学校に通ったのは半年間に過ぎない。私は、中学3年の9月に、この学校に転入学したのだ。田園調布中学はその3年前に設立されたばかりで、校舎は木造2階建ての小さなものだった。1学年に3つのクラスがあり、私は3年B組に入った。1クラスの生徒は約

60人で、もちろん共学だったが、男子の方が女子より少しだけ多かった。担任は後藤徳太郎という英語担当の先生だった。

転入学して4,5ヵ月後に高校入試を受けることはもちろんわかっていた。当時の都立高校に入るための試験はアチーブメントテスト(略称はアチーブ)という共通試験だった。その科目は8科目で、国語、数学、理科、社会、図工、音楽、家庭、体育だったと思う。各科目50点で、400点満点だった。英語は試験科目ではなかった。これは、英語が中学で必修科目ではなかったためだったが、今から思うと奇妙なことだった。

アチーブは、それ以前に2回しかなかったはずだ。したがって、過去問も少しだけしかなかったのだが、それを見ると、いわゆる主要科目の国語、数学、理科、社会の問題はやさしく、私はとくに試験勉強をする必要はないと思った。ところが、その他の4科目には困った。というのは、転入学する前にいた灘中では、こういう科目はまったく軽視されていたからだ。灘中は、今では誰でも知っている有名校の灘高の併設中学で、6年一貫の大学受験教育を行っていたので、主要4科目と英語に力を注いでいた。

私は、急いで売れ残っていた教科書や参考書(当時そういうものは多くはなかった)を買って集めて、受験勉強をした。誰かに教わるなどということは考えもしなかった。とにかく何でも頭に詰め込んだ。しかし、困ったのは音楽だった。それまで楽譜を読む練習を全然していなか

ったので、楽譜に関する問題は難しかった。ハーモニカで音を出してみても、ある程度メロディーに見当をつけることができるようになった。これは、実際にテストを受けたときに役立ったと思う。バタバタの受験勉強の効果はあった。12月に受けた受験者7千人規模の模擬試験で、ベストテンに入ることができ、賞品をもらった。それが何だったかは憶えていない。

実際にアチーブを受けたのは、翌年の1月末か2月初めだったはずだ。当時の都立高校は学区に分けられており、田園調布中学を卒業する生徒は第1学区の高校に進学することができた。この仕組みは、今でも基本的に同じではないかと思う。第1学区には、日比谷高校(旧一中)、小山台高校(旧八中)、三田高校(旧六女)、八潮高校(旧八女)などの旧ナンバーズクールがあった。田園調布中学で成績上位の男子は小山台、女子は三田か八潮を志望するのが普通だったので、私も小山台を志望するつもりだった。

ところが、志望校を決める段階で、担任の後藤先生は私にあっさり「君は日比谷に行きなさい」と言われた。私は少し驚いたが、素直に「はい」と答えた。当時の新制中学の先生は実力・人格に優れた人ばかりではなかったが、後藤先生は尊敬できる方だった。私が前記の賞品を受け取りに出かけたとき、付き添ってくださって、いろいろ話をした。まったく偶然だが、こういう良い先生に巡り合ったのは幸せだった。

本番のアチーブの成績は400点満点の368点で、悪くはないが、とくに良いとも言えなかった。減点されたのは、やはり主要科目以外で、今でも憶えているのは、体育の問題でかなり大きな減点を喰ったことだ。リレー競走でバトンを渡す距離を問う三択か五択の問題を間違えた。20メートルが正解だということを、そのとき初めて知った。田園調布中学では、380点以上取った人がひとりいた。それは女の子で、私と同じ組にいたY.A.さんだった。口数の少ないおとなしい人だったが、できる人だということは私にもわかっていた。Y.A.さんにかかなりの点差をつけられたのには驚いたが、口惜しいとは思わなかった。

Y.A.さんは三田高校からお茶の水女子大学理学部に入り、生物物理学の研究室で卒業研究をした後、医学系の国立研究所に勤務した。彼女の指導教員が、あとになって東大理学部教授になったため、何かの機会にY.A.さんがその教授の教え子だったことがわかった。私は、相当長い年月を経たあとで、Y.A.さんと1回か2回会う機会があった(姓が変わって、Y.S.さんだった)。

田園調布中学の同級生に高木敬介君という人がいた。同君の早過ぎた死は痛恨の極みであった。私が田園調布中学に転入学したとき、高木君は病気で欠席していた。最初に知り合った生徒たちが、異口同音に、高木君がクラスの1番だが、体調が良くないことが多く、しばしば休むのだと教えてくれた。明らかに、高木君は人望のある生徒だったのだ。私は、どんな人なのだろうと興味をもった。何日か後に彼が出てきたとき、私は成程と思った。確かに、彼には14.5歳の少年とは思えぬ落ち着きがあり、他の生徒を統率する力が身に付いていた。高木君と私は直ぐに仲良くなった。

高木君の家は田園調布の高級住宅地の中ほどでやや東横線寄り(現在の田園調布三丁目)にあった。私は、そのお宅に中学卒業以前に一度伺ったことがある。和服姿のお母上が大変上品な方だということが印象に残った。お母上は、第一生命保険を創立した矢野恒太(やの・つねた)の娘だということだった。これは、担任教員と保護者との個別面談で、私の母が後藤先生から聞いたのではないかと思う。個人情報保護に気を使うことのない時代だった。高木君のお父上は、当時、東京海上火災保険(現在の東京海上日動火災保険の前身)の幹部で、あとで同社社長になられた。高木君にはお兄さんが2人いたようだったが、当時そのひとは東大工学部の学生だったと思う。

高木君は小山台高校、私は日比谷高校に進学し、私の一家が荻窪に移ったこともあり(私の一家は8カ月の間に2度転居した)、その後高木君と行き来することは途絶えた。それから3年後の昭和30年(1955年)に、私は東大教養学

部に入学した。高木君も東大に入っているだろうと思い、東大教養学部新聞に掲載された合格者名簿をよく見たが、彼の名前はなかった。意外だった。

その1年後、また合格者名簿を見て、今度は高木君の名前を見つけた。直ぐに、お祝いの手紙を送ったところ、返事が来て、昨年は彼自身が受からなかったことで混乱してしまい、私にお祝いの手紙を出さなかった失礼をお詫びすると書いてあった。その年、駒場キャンパスで彼に何度か会ったが、彼は文科で、私は理科だったこともあって、しばしば会う機会があったわけではない。私が理学部化学科に進学することになった後で、彼が「理学部か、それは惜しいな」と言ったことはよく憶えている、しかし、唐突に言われたので、私は何故「惜しい」のかわからないままになった。

翌昭和32年(1957年)の4月に私は本郷キャンパスの理学部に進学したので、高木君と会うことはなくなった。その年の10月か11月のことだ。私は、高木君が亡くなったという驚くべき知らせを受け取った。知らせたくれたのは、やはり田園調布中学同級生のH.U.君だったと思う。死因は肝臓がんで、高木君のがんは急速に進行したのだ。患者が若いときには、そういうことがあるそうだ。僅か2,3ヵ月前の夏休みには、元気に山登りをしていたと聞いた。

ご自宅で行われた葬儀に参列し、暫く後で、これもご自宅で行われた偲ぶ会にも参加した。ご両親は普段と少しも変わらず淡々としておられて、むしろ私が違和感を覚えるほどだった。日本には喜怒哀楽を表に出さないのを良しとする伝統がある。ご両親は、哀しみを表さないたしなみをもっておられたのだろう。偲ぶ会するとき、私は他の参会者よりも早く辞去した。このとき、お母上は玄関で私ひとりを見送ってくださった。

それから十数年後、私は高木君のお母上に違いないと思われる方を見かけたことがある。それは、高輪にある開東閣（三菱グループの倶楽部）の庭園で藤の花の観賞会があったときのこ

とだ。私は、家内の両親らと参会していた。参会者のなかに、気品のある和服姿の老婦人を見かけ、あっ！と思った。挨拶することは控えたが、陰ながらご健勝とご長寿をお祈りした。

高木君が元気でいて、田園調布中学の同窓会に出ていたならば、私もこの同窓会に出席する気になっていたかもしれない。高木君こそ田園調布中学と私を結ぶ一番の絆だったのだから。
(おわり)